

# 子どもの「運動遊び」に関する研究動向と展望に関する一考察 —CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—

## A Review of Research Trends in Infant Exercise Play: Through Text Mining of Titles of Research Papers in the CiNii Database

畑野 裕子

### 要旨

本報では、これまでの「運動遊び」に関する研究で CiNii に掲載されている文献とそれらの先行研究を整理し、「運動遊び」をキーワードとして、テキストマイニングを用いた計量的なアプローチを中心に、研究の動向をまとめて検討した。論文のタイトルに含まれる語句を分析した結果、「遊び」「幼児」「子ども」「体育」「能力」「幼稚園」「スポーツ」「身体」「小学校」等が出現頻度の高い語句として検出された。論文のタイトルは、文献の出典によって若干異なる傾向がみられた。また、年代による変遷では、「幼児」「発達」は、いずれの年代間でも共有された抽出語で、「運動」「遊び」「研究」に関しては、1977年以降各年代に共通にみられることが読み取れた。さらに年代間で共通にみられる語句に注目し、具体的に特徴的と思われる文献をあげて報告した。

キーワード：子ども 運動遊び 研究動向

### 1. 緒言

近年、社会環境や生活様式の変化を背景として、子どもの体力・運動能力の低下傾向が指摘されている。例えば、スポーツ白書に掲載されている、文部科学省が昭和39年から実施している「体力・運動能力調査」をみても。平成10年度の新体力テスト以降の合計点の推移において、点数は、「ほとんどの年代で緩やかな増加傾向」となっている（スポーツ庁, 2017a）。しかし、以前から継続実施されている項目では、「昭和60年頃との比較において、握力及び走能力（50m走・持久走）、跳能力（立ち幅跳び）、投能力（ソフトボール投げ・ハンドボール投げ）に係る項目は、依然低い水準となっている」。また、2016年には、「体力・運動能力調査」と同時に「運動・スポーツの実施状況」についても調査が実施され、翌年10月に公開されている（スポーツ庁, 2017b）。具体的には、小学生（6～11歳）を対象に「小学校入学前はどのくらい外遊びをしていたか」などの項目について調査されている。その合計点（80点満点）の平均をみると、10歳児において、「週に6日以上」と回答した男子は、57.9点、女子は、59.1点であった。そして、「男子の72.7%、女子の60.1%が今もほとんど毎日運動していると回答しており、今はしていないと答えたのは男子3.8%、女子2.3%だけであった。一方、入学前の外遊びが「週に1日以下」の10歳児の合計点の平均についてみると、男子は52.8点、女子は51.2点で、男子45.2%、女子13.3%がほとんど毎日運動していると回答し、運動していないと回答した男子は11.3%、女子16.7%であった。」（日本経済新聞社, 2017）このような傾向は、6～11

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

歳のいずれの年齢においてもみられた。これらの結果をもとに、「幼児期によく外遊びをしていた子どもほど、小学校に入ってから体力がある」「幼児期に体を動かすことは、小学校での運動やスポーツの習慣につながっている」ということがマスメディアで報道され（朝日新聞, 2017）、子どもの体力・運動能力に関する社会的な関心を集めていると思われる。

子どもの体力や運動能力に関連する研究を整理した論文を概観すると、高井（2007a）の子どもの調整力に関する研究動向についての報告があげられる。具体的には、「調整力の定義は、動き（動作）を規定する体力要素（physical resources）であり心理的要素をも含むとされるが、研究者によって見解が様々」と述べている。そして、体力科学センター「調整力プロジェクト」（森下, 1998）や、幼児の調整力と生活環境条件の関連性に関して紹介している。さらに高井は、第2報（2007b）においても、その「調整力プロジェクト」について取り上げ、松浦（1998）が「調整力プロジェクト」の一貫として検討した調整力の因子構造についてまとめている。そして、調整力を育むためには、幼少年期における運動遊びの効果的な学びの必要性を示唆している。

その他にも、このような「運動遊び」に関連して、近年の幼児教育における身体活動の意義や課題等の先行研究を整理した論文を概観すると、青木（2016）の報告があげられる。具体的には、健康づくりを意図する運動生理学的観点から、国内外の子どもの健康づくりに関する政策や先行研究に示されている子どもの身体活動の意義と背景について整理し、幼児期の身体活動における運動生理学的課題を検討している。

一方、2017年3月に告示された学習指導要領の小学校体育科をみると、第1学年及び第2学年の目標は、次のように示されている（文部科学省, 2017）。「(1)各種の運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、基本的な動きを身に付けるようにする。(2)各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。(新設) (3)各種の運動遊びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、健康・安全に留意したりし、意欲的に運動をする態度を養う。」この中で注目されるのは、新設の目標も含め現行（2008年告示）の学習指導要領の同目標では使用されていない、「運動遊び」という用語が示されていることである。また、その内容をみると、現行の「体づくり運動」（文部科学省, 2008）は、改訂後に「体づくりの運動遊び」となり、「運動遊び」という用語として示されており、低学年における「運動遊び」の重要性が反映されていると推察される。

以上のことから、子どもの体力や運動能力に関する研究を概観すると、前述した高井の報告は、先行研究で取り上げられた調整力に関する研究動向を整理するという点において、一定の成果が得られたと思われる。青木（2016）の報告も、幼児期の身体活動における運動生理学的課題に関する研究動向を整理するという点では、同様に成果が示されている。これらの先行研究の文脈を踏まえつつ、調整力を高める要因としてあげられている「運動遊び」に関して、2017年の学習指導要領等の改訂を機に、従来の「運動遊び」に関する研究を整理し、今後の課題を明確にすることは、意義あることと思われる。そこで本報では、「運動遊び」に関する文献を整理して、それらの研究動向を分析し、今後の研究の方向性について展望することを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 対象文献の抽出

国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ (CiNii) を使用し、1958年～2017年 (8月) までに発行された文献について、「運動遊び」と「運動あそび」の二つのキーワードをもとに、OR検索を行い、調査対象文献を抽出した。(キーワードは、「運動遊び」と「運動あそび」の二つであるが、以下本報では、「運動遊び」として表記することとする。) また、これらのデータベースからは、論文タイトルの他に、執筆者氏名、出典、執筆年、論文のページ数が検索可能であるため、それらも収集した。

次に、抽出文献をもとに、以下にあげる文献の出典に関して、調査対象文献を整理した。なお、学会出版物においては、一般的な学会発表要旨を含んでいるものの、CiNiiのキーワード検索により抽出された文献に含まれていることから、分析対象とした。

- ①大学紀要：大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献
- ②学会出版物：日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物、日本発育発達学会、日本保育学会、日本体育学会、日本教育医学会、日本教科教育学会などの学会誌、学会大会予稿集、及び研究報告集などに所収されている文献
- ③センター・研究所・研究会：教育センター、教育開発研究所、身体運動文化研究会などが発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献
- ④協会・連盟：日本健康レクリエーション協会、日本女子体育連盟などの協会・連盟が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献
- ⑤出版社：出版社が発行する研究雑誌など
- ⑥その他
- ⑦未登録論文

また、1958年～2017年までに発行された文献について、経年の変化を概括するために、学習指導要領の改訂時期 (1958年、1968年、1977年、1989年、1999年、2008年、2017年) を参考としつつも先行実施や改訂間の年数を考慮し、本報では便宜上次のように年代を5つに区分 (1958年～1976年、1977年～1988年、1989年～1998年、1999年～2008年、2009年～2017年) して、整理することとした。その際、1958年～1967年、1968年～1976年の掲載状況から、1977年以前は、他に比較して数少なかつたため、この2つの年代をまとめて、1958年～1976年とすることとした。

### 2.2 分析の手続き

分析は、上記に抽出した論文のタイトルに対するテキストマイニング KH Coder2.00f (樋口, 2001, 2014, 2015) を用いて実施した。同様の手法を用いた研究としては、例えば、政策系大学に関する研究動向を分析した小田切 (2014) の報告がある。これを参考に本研究では、以下の手続きで分析を進めた。

#### (1) 「運動遊び」に関する研究の構造の把握

まず、抽出した文献の論文タイトルについて形態素解析を行ない、論文タイトルに含まれて

いる名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから研究の構造を解釈した。

### (2) 論文種別による研究動向の差異の検討

次に、出現頻度上位語句の共起ネットワークに、論文種別を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、論文種別による研究動向の差異について検討した。

### (3) 年代別にみた研究動向の推移の検討

同様に、年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみた研究動向の推移について検討した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 「運動遊び」に関する論文の CiNii 掲載状況

2017年8月29日現在、抽出文献は611件であった。なお、これら611件の抽出文献の中で、CiNiiに掲載されているタイトル名として、論文名以外の語句を有する文献がみられた。そこで、それらの文献については、個々に論文名を確認した。

表1は、それら抽出文献について、文献の出典別に、度数及びパーセンテージを示したものである。文献の出典をみると、大学が発行する研究紀要が全体の46.3%と最も多く、続いて、学会が発行する学会出版物が36.5%、出版社が7.5%、協会・連盟が4.6%、センター・研究所・研究会が2.6%となっている。また、発表年で見ると、表2に示したように、2009年～2017年が全体の51.1%と最も多く、続いて、1999年～2008年が26.8%、1989年～1998年が10.1%、1977年～1988年が9.3%、1958年～1976年が2.6%となっている。

表3は、文献の出典と発表年をクロス集計した結果を示したものである。以下、0件は割愛する。大学が発行する研究紀要をみると、2009年～2017年が167件、1999年～2008年が70件、1989年～1998年が28件、1977年～1988年が14件、1958年～1976年が4件となっている。学会が発行する学会出版物をみると、2009年～2017年が87件、1999年～2008年が74件、1989年～1998年が30件、1977年～1988年が25件、1958年～1976年が7件となっている。センター・研究所・研究会が発行する研究紀要等は、2009年～2017年が14件、1999年～2008年と1977年～1988年が1件となっている。協会・連盟が発行する研究紀要等は、2009年～2017年が14件、1999年～2008年が11件、1989年～1998年が2件、1958年～1976年が1件となっている。出版社が発行する論文をみると、2009年～2017年が21件、1999年～2008年が7件、1977年～1988年が14件、

表1 「運動遊び」に関する研究の出典別度数及びパーセンテージ

論文種別	度数	%
大学紀要	283	46.3
学会出版物	223	36.5
センター・研究所・研究会	16	2.6
協会・連盟	28	4.6
出版社	46	7.5
未登録論文	15	2.5
総計	611	100.0

表2 「運動遊び」に関する研究の年代別度数及びパーセンテージ

年代	度数	%
1958年～1976年	16	2.6
1977年～1988年	57	9.3
1989年～1998年	62	10.1
1999年～2008年	164	26.8
2009年～2017年	312	51.1
総計	611	100.0

表3 「運動遊び」に関する研究における情報文献の出典と発表年のクロス集計

年代	大学紀要	学会出版物	センター・研究所・研究会	協会・連盟	出版社	未登録論文	総計
1958年～1976年	4	7	0	1	4	0	16
1977年～1988年	14	25	1	0	14	3	57
1989年～1998年	28	30	0	2	0	2	62
1999年～2008年	70	74	1	11	7	1	164
2009年～2017年	167	87	14	14	21	9	312
総計	283	223	16	28	46	15	611

1958年～1976年が4件となっている。なお、1958年～1976年（総計16件）とセンター・研究所・研究会（総計16件）、未登録論文（総計15件）は、いずれも数少ない。

以上の結果から、「運動遊び」における研究の年次変化については、大学紀要、学会出版物、センター・研究所・研究会、協会・連盟のいずれの出典においても、増加の傾向がみられた。したがって、「運動遊び」に関する研究は、研究自体が年次変化に伴い増加してきていると言えよう。

### 3.2 「運動遊び」に関する論文タイトルの形態素解析

「運動遊び」に関する研究の動向を明らかにするために、論文タイトルにおいてどのような語句が選択される傾向にあるのかについて、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、「運動遊び」に関する研究の論文タイトルからの抽出語総数は、計6,156語であった。表4は、文献のタイトルに使用されている名詞句のうち、出現回数10以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。

抽出語をみると、最も出現回数が多いのは「遊び」508であり、続いて「幼児」278、「子ども」111、「体育」68、「能力」64、「幼稚園」55、「スポーツ」47、「身体」42、「小学校」41、「児童」36、「体力」35、「動き」31、「環境」「効果」29、「中心」24、「学生」22、「学年」「障害」18、「視点」「事例」17、「課題」「実態」16、「取り組み」「親子」「対象」「乳幼児」15、「ボール」「状況」「内容」14、「学校」「基本」「地域」「保育園」「幼少」12、「試み」11、「リズム」「関わり」「教諭」「有能」「遊び場」「遊具」10となっている。

表4 「運動遊び」に関する研究における出現回数10以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
遊び	508	児童	36	視点	17	状況	14	関わり	10
幼児	278	体力	35	事例	17	内容	14	教諭	10
子ども	111	動き	31	課題	16	学校	12	有能	10
体育	68	環境	29	実態	16	基本	12	遊び場	10
能力	64	効果	29	取り組み	15	地域	12	遊具	10
幼稚園	55	中心	24	親子	15	保育園	12		
スポーツ	47	学生	22	対象	15	幼少	12		
身体	42	学年	18	乳幼児	15	試み	11		
小学校	41	障害	18	ボール	14	リズム	10		

### 3.3 「運動遊び」に関する研究の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表4に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果については図1にし、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみとめる。

論文に選択される語句の傾向として、表4の出現回数10以上の名詞句と同様に、図1の抽出語間の関連である共起ネットワークにおいても、最も出現回数が多い「遊び」を中心として、次のようにとらえられる。「運動遊び」に関する研究の構造としては、幼児の保育や小学校における運動を対象とした研究が中核をなしているにとらえられる。また、身体活動が運動能力に及ぼす影響や関連、幼児の遊びと発達、幼稚園の保育における経験や援助と学生の意識実態調査、児童の体力向上プログラムに関する実践報告や研究、小学校の体育授業における動きの学習などが読み取れる。

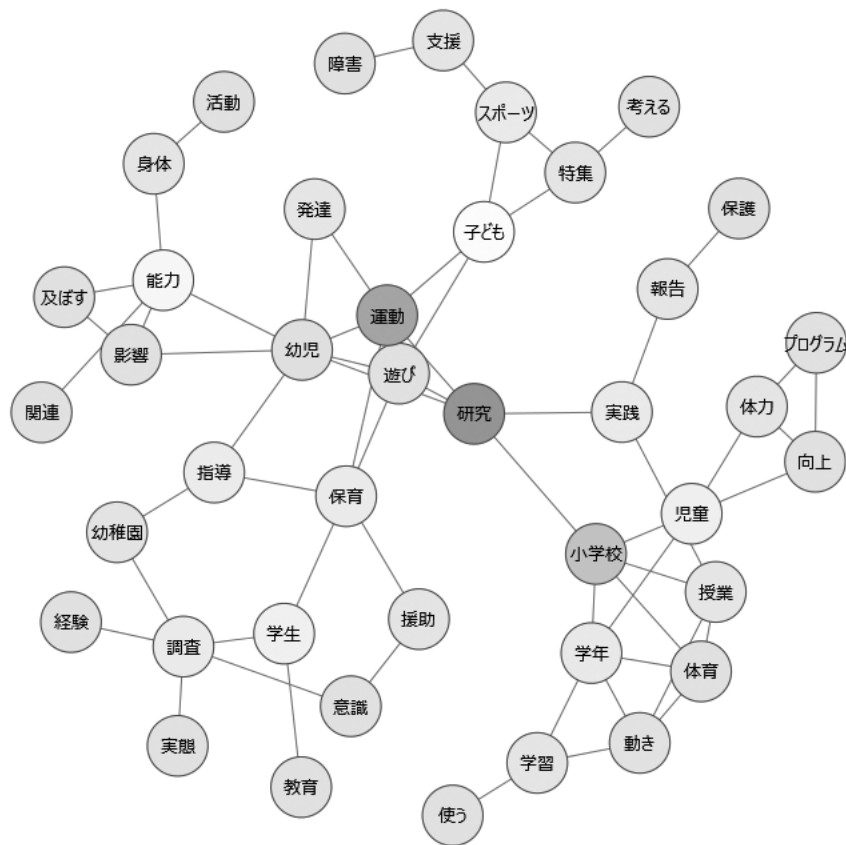


図1 抽出語間の共起ネットワーク

### 3.4 論文種別による研究動向の差異の検討

論文種別との共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図2に示す。図2より、大学紀要においては、幼稚園における活動や指導に関する考察、幼児の運動能力と遊びの研究、保育実践ととらえられる。学会論文においては、幼児や子どもの運動能力の発達や遊びの影響に関する研究ととらえられる。協会・連盟、出版社においては、スポーツや体育の授業などが共通ととらえられる。このように大学紀要、学会出版物においては共有する抽出語が多くみら

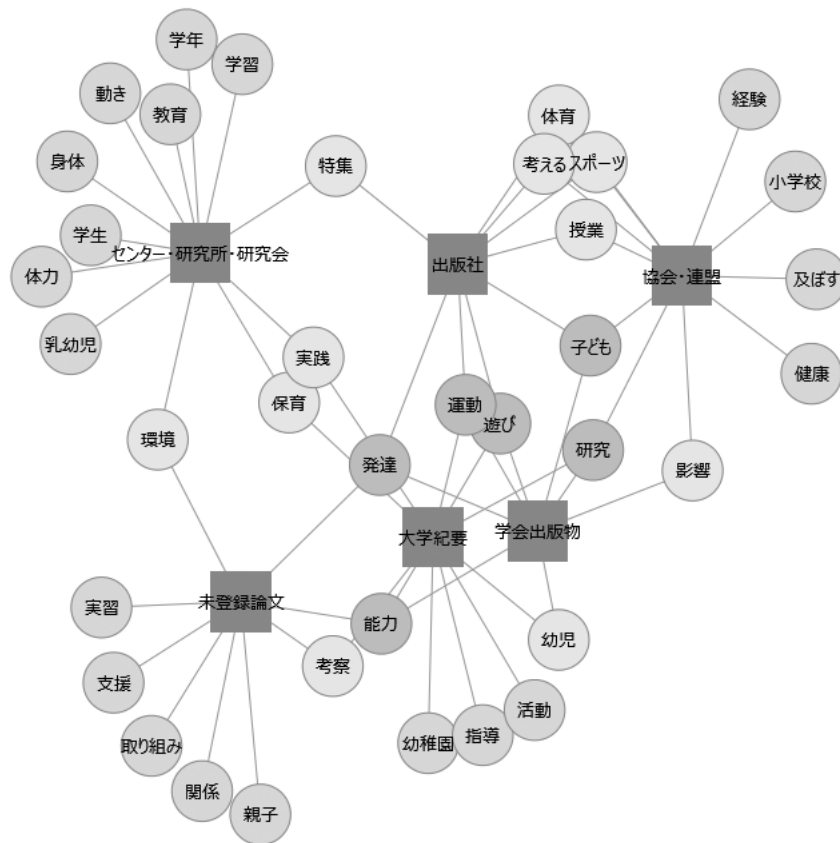


図2 論文種別と抽出語との共起ネットワーク

れ、保育や教育現場における子ども（幼児）の運動能力の発達や遊びの影響、幼稚園における活動や（保育）指導など実践を踏まえた研究テーマ設定がされていることが推察される。それに対して、協会・連盟は、小学校の経験が健康に及ぼす影響やスポーツや体育の授業ととらえられる。出版社においては異なるアプローチがみられ、「運動遊び」に関する研究は、幼児というよりもむしろ、子どものスポーツ場面や小学校における体育の授業の教材に関するテーマに集約されるととらえられる。なお、数は少ないものの、センター・研究所・研究会における「運動遊び」に関する研究は、保育実践や身体・動き・体力について乳幼児から学生を対象にした教育に集約されよう。

### 3.5 年代別にみた研究動向の推移の検討

年代との共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図3に示す。図3において、中心にある「幼児」「発達」という抽出語は、1958年～1976年、1977年～1988年、1989年～1998年、1999年～2008年、2009年～2017年のいずれの年代間でも共有された抽出語である。また「運動」「遊び」「研究」に関しては、1958年～1976年を除く全ての年代で共有された抽出語である。したがって、「幼児」「発達」「運動」「遊び」「研究」という抽出語は、各年代に共通にみられることが読み取れる。1989年～1998年、1999年～2008年、2009年～2017年では、「指導」「保育」という抽出語もみられるようになる。

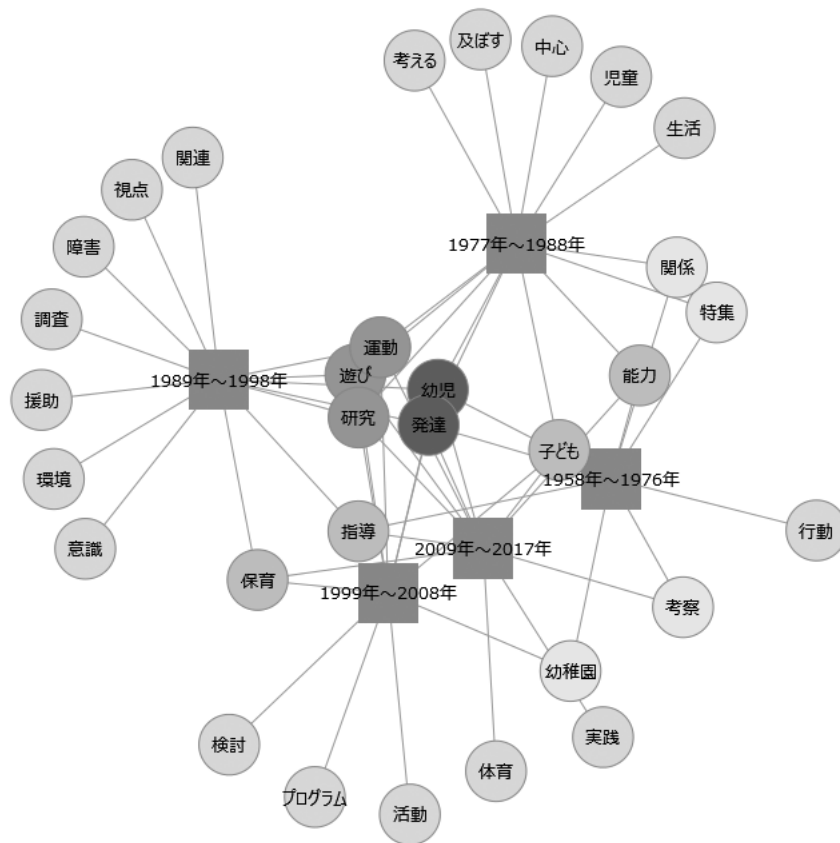


図3 年代と抽出語との共起ネットワーク

### 3.6 「運動遊び」の研究にみられる抽出語に関連する特徴的な例

以上、順に「運動遊び」に関する論文の CiNii 掲載状況、「運動遊び」に関する研究の構造、論文種別による研究動向の差異、年代別にみた研究動向の推移を検討した。検索では、文献において「運動遊び」がキーワードで登録されている場合もあり、タイトルそのものに含んでいるとは限らない。しかし、その中でタイトルを検索するという枠組みの限界はあるものの、全体的な研究傾向を明らかにすることができた。ここで、近年の文献数の増加を踏まえ、さらに年代間で共通にみられる語句に注目し、具体的に特徴的と思われる文献をあげて、「運動遊び」に関する研究の動向をみしてみる。

まず、特徴的なのは、幼児の運動プログラムを開発し、その成果を集団における身体能力測定結果の平均値等によって分析している研究があげられる。その中でも、大学紀要からみると、幼稚園における活動や指導に関する考察として、松寄ら（2016）は、幼稚園における組織的な運動遊びの取り組みが、幼稚園児（3歳～5歳）の身体能力に与える影響を明らかにするために、取り組み前後（秋期・冬期）の身体能力を検討し、その結果を次のように報告している。「取り組み後に身体能力が伸び、年齢による伸びの違いは見られなかった。また取り組み前後の両時期で性差がなかった種目が多く、…『体支持持続時間』、『ボール投げ』は5歳児で個人差が大きく、特に女兒は『往復走』、『立ち幅跳び』、『ボール投げ』の種目で男児より低く、その性差は秋期よりも冬期で大きかった。」

また、板谷（2016）は、幼児期に身につけるべき基本的な運動のひとつとして、走運動を取



り上げ幼児の疾走速度を即時的に向上させる「運動遊び」に関して報告している。具体的には、しっぽ取りのルールを理解できる年長児を対象に、板谷（2014）によって提案された「改良しっぽ取り」を行い、その前後で25m走のタイムを測定している。その結果、「改良しっぽ取り」は、即時的に幼児の疾走速度を向上させる上で効果的であることを示唆している。このように大学紀要においては、本間（1978）が40年程前から取り組んだように、幼児の運動遊びが運動能力に及ぼす影響に関する研究が普遍的なテーマであることが確認できる。

一方、幼児の「運動遊び」に関して、運動能力の側面からだけでなく、幼児期における「運動遊び」の心理的・社会的効果を明らかにしようとしている研究もみられる。鈴木（2017）は、幼稚園5歳～6歳児が自由遊びの中で行う戸外での「運動遊び」としてのドッジボールの場面を対象として、幼児期における「運動遊び」の心理社会的効果を明らかにしようとしている。開発した幼児版「遊び込める」尺度を用い、「遊び込める」という状況がどのように生まれ、どのような関係のもとに、どのように広がったり深まったりするのかという視点から分析している。そして、ドッジボールの展開としてのフェーズと、そのフェーズに沿った抽出児の変容が報告されている。なお、子どもの「運動遊び」と社会性の発達に関しては、従来から丹羽（1981）をはじめとして報告されていることは、言うまでもない。

次に、学会出版物についてみると、幼児や子どもの運動能力の発達や遊びの影響に関する研究の中でも、運動能力テストだけでなく、発達に関連する生活の観点から検討した研究もみられる。池田ら（2009）は、幼児の身体活動と生活リズムおよび運動能力の関係について検討している。具体的には、5歳児に5項目の運動能力テストを、保護者に幼児の生活リズムと身体活動に関する調査を実施している。そして、探索的因子分析の結果、「運動能力」「身体活動」「朝の生活リズム」「晩の生活リズム」の4因子が抽出されている。また、「晩の生活リズム」と「身体活動」において有意な関連は認められなかったが、「運動能力」と「身体活動」、「朝の生活リズム」と「運動能力」には有意な関連が認められたと報告している。

宮口ら（2012）は、幼児の敏捷性の発達に対するテレビゲーム及び「運動遊び」の影響に関して、発育発達の観点から報告している。具体的には、幼児を対象に危険物から咄嗟に回避する能力に関わる単純反応時間及び反復横跳びを測定し、発達様相を調べるとともに、テレビゲームや好きな遊びの影響について検討している。単純反応時間、反復横跳びともに加齢に伴い発達し、テレビゲームは視覚情報に対する上肢系の反応時間に対する効果はあるが、全身の敏捷性を高める効果はなかったと報告している。一方、動的遊びの実施は、反応の速さを高めるとともに全身的な動作の敏捷性を高める効果があることが明らかにされている。このようなことは、テレビゲームが生活の中に普及した時代における、子どもの遊びに関する問題点を反映している研究と言えよう。

その他にも、中村（1997）は、2000年の学習指導要領等の改定以前から、幼児の運動能力の低下を危惧し、『運動能力の発達と運動遊び』の視点より」と題して、日本保育学会などで報告している。中村は、一貫して子どもの「運動遊び」に関する研究を継続し、『運動遊び』の推進（特集 知っておきたい小児保健のエッセンス）（2014）と題して、体育や保育の関連学会以外においても発表を続けている。また、加納ら（2016）の「幼児期における定位・分化能力の発達の特性に関する研究2」など、幼児期における運動能力に関する基礎的な研究も数

多く行われている。

出版社における研究の中でも、「運動遊び」に関連するものとして、たとえば、阿江（2014）は、子どもの動きの発達に関してバイオメカニクス的に検討し、体育的運動・遊びの体系的確立を提案している。同じくバイオメカニクス研究者である大築（2009）は、学術会議における子どもへの取り組みに関して、子どものからだに運動・遊び・スポーツの観点から報告している。

研究テーマから先行研究をみると、体育の授業との関連からは、砥堀ら（1996）は、幼児期における運動遊びと体育指導に関して一考察を報告している。近年では、亀山（2015）が子どもの運動遊びの姿を手掛かりにした体育授業の可能性に関して、小学校第4学年ゴール型ゲーム「サッカー風ゲーム」の実践を通して報告している。このように「運動遊び」は、体育の授業に関連するテーマにおいても報告されており、実践的アプローチに関して示唆されよう。

保育者とのかかわりに関する研究をみると、村岡（1995）が、運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助に関して、鬼遊びの場面から報告している。また、岡澤（2005）は、幼児の運動遊びでの有能感形成におよぼす保育者の言語活動の影響について報告している。

将来幼児教育に関わる学生の観点から検討した研究をみると、黒岩（1999）が、保育に携わっていく学生たちが、自分自身の子ども時代の遊びを再確認することにつながるという観点から、保育科学生の屋外での運動遊びの実践と検討を報告している。岸本ら（2002）は、幼児教育専攻学生に対して調査を行い、「かくれんぼ」と「鬼ごっこ」は経験率90%以上で残存性が最も高い伝承遊びであったことなど、青年女子層の遊び体験に関する研究を報告している。同様に、森ら（2002）も、幼児・学童期における遊び体験に関する研究に関して、幼児教育専攻学生に対する調査から報告している。その結果、「よくした」遊びについては、「鬼ごっこ」を筆頭に、「かくれんぼ」や「だるまさんがころんだ」などの伝承遊びが多いことなどを報告している。また、居住地環境により遊びの経験の内容や程度に差があることを保育者養成において留意すべきと指摘している。森ら（2007）は、保育・教育専攻学生の運動遊びの体験に関して調査し、対象者全員が経験した遊びが「鬼ごっこ」「だるまさんがころんだ」「かくれんぼ」であったと報告している。また、次代の幼児教育、学校教育を担う学生たちにも「運動遊び」の経験が減少する兆候が認められるように思われると危惧している。

#### 4. 総合的考察

本報では、これまでの「運動遊び」に関する研究で、CiNiiに掲載されている文献とそれらの先行研究を整理し、「運動遊び」をキーワードとして、テキストマイニングを用いた計量的なアプローチから研究の動向をまとめて検討した。その結果、得られた知見に関して整理・考察すると、次のようである。

まず第1に、選択される論文のテーマには、キーワードに関する凝集性が示されている点である。論文タイトルに含まれる語句を分析した結果、突出して出現回数の多い「遊び」ほか、「幼児」「子ども」「体育」「能力」「幼稚園」「スポーツ」「身体」「小学校」等が出現頻度の高い語句として検出された。このように論文のテーマ選択に一定の傾向が伺えるため、論文タイトルに出現する回数の多かった60語について、共起ネットワークを作成した。この結果は、研究

内容の多様性を前提としつつも、そのテーマの分類が可能であることを示唆していると考えられる。

第2に、文献の出典によって論文のタイトルが若干異なる傾向がみられた。しかしながら、年代による変遷では、「幼児」「発達」は、いずれの年代間でも共有された抽出語で、「運動」「遊び」「研究」に関しては、1977年以降各年代に共通にみられることが読み取れる。

一方、「運動遊び」に関する研究を対象として、体系的に収集するための基準等に関しては、明確に示されているわけではない。本報においては、一例として国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ (CiNii) における文献を分析対象とすることによって、「運動遊び」に関する研究の動向を探る端緒としようとした。そして、「運動遊び」の研究動向について、文献タイトルという部分ではあるが、その構造を明らかにすることができたと思われる。しかしながら、本報は CiNii に掲載されている文献タイトルという特定の事項を扱ったものであり、全研究内容の詳細な議論の一般化には限界がある。今後、研究内容の詳細な比較、そして、国内外の学術誌における研究動向の把握等を含めて、検討を続けることが不可欠であると考えられる。

第3は、近年の文献数の増加を踏まえた結果、さらに年代間で共通にみられる語句に注目し、具体的に特徴のみられる文献をあげて紹介した。特徴のある研究として取り上げた文献は、幼児の運動プログラムの開発と運動能力との分析、子どもの運動遊びと社会性の発達、幼児期における運動能力に関する基礎的研究、体育の授業との関連、保育者とのかかわり、保育科学生・幼児教育専攻学生の運動遊びの体験などに関するものである。その中でも特に、将来の保育者の資質を探る一助にしようとして、保育科学生・幼児教育専攻学生が、子ども時代にどのような「運動遊び」の体験をしてきたかについて検討することは、重要であると思われる。なぜなら、保育者養成課程の立場から「運動遊び」に関して考えると、子ども時代の体験内容が保育者になった際に、子どもたちへの指導に影響を与えることが推察されるからである。したがって、これらのことを背景に、今後の研究動向に関して展望すると、今後の教員養成改善に役立てるために、将来の保育者となる学生の「運動遊び」体験を明らかにし、その傾向を踏まえた保育者養成プログラムの作成に関する研究が必要と考える。

## 文献

- 阿江通良 (2009) 幼児の動きの発達にはさらに何が必要か—日本体育協会「幼少年期に身につけておくべき基礎的動きプロジェクト」から (特集 子どものからだと運動・遊び・スポーツ). 体育の科学, 59-5: 317-323.
- 阿江通良 (2014) 子どもの動きの発達: 体育的運動・遊びの体系的確立の提案 (特集 子どもの動きの発達). 体育の科学, 64-11: 758-764.
- 青木好子 (2016) 幼児教育における身体活動の意義と課題. 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇, 44: 1-18.
- 樋口耕一 (2001) KH Coder (<http://khc.sourceforge.net>) [最終アクセス2017年10月19日].
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一 (2015) KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル. [khcoder\\_manual.pdf](#).
- 堀田典生, 須永進, 青木知史 (2016) 子どもの育成と健康度に関する研究 II—幼児の身体活動性を規定する因子の幼稚園児と保育園児の違い—. 生命健康科学研究所紀要, 12: 18-25.
- 本間純子 (1978) 幼児の運動能力に影響を及ぼす要因に関する研究: 特に運動遊びについて. 日本体育大学紀要, 7: 125-136.
- 岸本肇・勝木洋子 (2002) 青年女子層の遊び体験に関する研究—幼児教育専攻学生に対する調査をもとにして—. 神戸大学発達科学部研究紀要, 9-2: 29-37.

- 板谷厚 (2014) 短時間の介入が幼児の25m走パフォーマンスに及ぼす即時効果. 教育医学, 59: 242-245.
- 板谷厚 (2016) 幼児の疾走速度を即時的に向上させる運動遊び. 北海道教育大学紀要. 自然科学編, 66-2: 21-27.
- 池田孝博, 青柳領 (2009) 幼児の生活と運動能力に関する因果モデルの検証--正しい生活リズムは身体活動や運動能力にどのように影響するのか?. 発育発達研究, 42: 11-23.
- 亀山亨 (2015) 体育・保健体育 子どもの運動遊びの姿を手掛かりにした体育授業の可能性: 小学校第4学年ゴール型ゲーム「サッカー風ゲーム」の実践を通して. 教育実践研究, 25: 163-168.
- 加納裕久, 丸山真司 (2016) 幼児期における定位・分化能力の発達の特性に関する研究2. 日本体育学会大会予稿集, 67: 314.
- 黒岩英子 (1999) 保育科学生の実験での運動遊びの実践と検討. 西南女学院短期大学研究紀要, 46: 145-154.
- 松浦義行 (1998) 調整力について (体育科学センター第4回公開講演会要旨, 昭和51年6月5日). 体育科学, 27: 137-146.
- 松崎洋子, 入澤里子, 朝井理香, 小林直実, 久留島太郎, 安藤温子, 武藤記世子, 木次昭子 (2016) 幼稚園における運動遊び活動が身体能力に及ぼす効果(1). 千葉大学教育学部研究紀要, 64: 103-111.
- 三木ひろみ (2016) 「多様な動きをつくる運動(遊び)」の「動きの評価」について. 日本体育学会大会予稿集, 67: 300.
- 宮口和義, 出村慎一 (2012) 幼児の敏捷性の発達に対するテレビゲーム及び運動遊びの影響. 発育発達研究, 55: 23-32.
- 森博文, 岸本肇, 栗原武志, 廣瀬勝弘, 北川隆 (2002) 幼児・学童期における遊び体験に関する研究: 幼児教育専攻学生に対する調査から. 九州女子大学紀要. 人文・社会科学編, 39-1: 31-44.
- 森下はるみ (1998) 幼児の体力・調整力テストの検討(体育科学センター第5回公開講演会講演要旨, 昭和52年6月4日). 体育科学, 27: 159-161.
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/tai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/tai.htm).
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領. 1384661\_4\_2, p.123-124.
- 村岡真澄 (1995) 運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助(1)鬼遊びの場面で. 愛知教育大学幼児教育研究, 4: 25-37.
- 中村和彦 (1997) 「運動能力の発達と運動遊び」の視点より. 日本保育学会大会研究論文集, 50: 75.
- 中村和彦 (2014) 運動遊びの推進 (特集 知っておきたい小児保健のエッセンス). 小児科診療, 77-9: 1171-1175.
- 中川保敬, 川崎順一郎, 唐杉敬 (1990) 幼児の運動遊びに関する研究: 競争に及ぼす要因分析. 熊本大学教育学部紀要. 自然科学, 39: 41-50.
- 日本経済新聞社 (2017) <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO22039030Y7A001C1CR8000/> [最終アクセス 2017年10月19日].
- 丹羽劭昭 (1981) 子どもの運動遊びと社会性の発達 (子どもの運動遊びを考える<特集>). 体育の科学, 31-5: 329-333.
- 小田切康彦 (2014) 政策系大学における研究動向: 論文タイトルを用いたテキストマイニングから. 徳島大学社会科学部研究, 28: 61-82.
- 岡澤哲子 (2005) 幼児の運動遊びでの有能感形成におよぼす保育者の言語活動の影響について. 人間文化研究科年報, 20: 229-243.
- 岡澤哲子 (2012) 幼児の運動能力からみた幼稚園における運動遊び指導内容の検討. 帝塚山大学現代生活学部紀要, 8: 31-46.
- 大築立志 (2009) 学術会議における子どもへの取り組み (特集 子どものからだと運動・遊び・スポーツ). 体育の科学, 59-5: 333-337.
- 鈴木裕子 (2017) 幼児期における運動遊びの心理社会的効果 —5から6歳児のドッジボール遊びに着目して—. 愛知教育大学研究報告. 教育科学編, 66: 29-37.
- スポーツ庁 (2017a) 平成28年度体力・運動能力調査報告書. [http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/10/1396889-3.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/10/1396889-3.pdf).
- スポーツ庁 (2017b) 幼児期の外遊びと小学生の運動習慣・体力との関係. [http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/10/1396897-5.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/10/1396897-5.pdf) p.15-16.
- 高井和夫 (2007) 子どもの調整力に関する研究動向について. 文教大学教育学部紀要, 41: 83-94.
- 高井和夫 (2007) 子どもの調整力に関する研究動向について (第2報). 生活科学研究, 29: 115-128.
- 砥堀雅信, 土田了輔, 永木耕介 (1996) 幼児期における運動遊びと体育指導に関する一考察. 上越教育大学研究紀要, 15-2: 223-231.